

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 小菅 優子
学位 博士 (保健学)
学位記番号 新大院博 (保) 第16号
学位授与の日付 平成28年3月23日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
博士論文名 リンパ球浸潤胃癌の病巣形成、胃型腸型形質発現及び浸潤リンパ球の特徴についての研究

論文審査委員 主査 岩淵 三哉
副査 中野 正明
副査 池主 雅臣

博士論文の要旨

本研究は、「リンパ球浸潤胃癌の病巣形成、胃型腸型形質発現及び浸潤リンパ球の特徴についての研究」を課題として遂行された。主な研究項目と成果は下記に要約された。

I 組織型と病巣構築

- ①典型像ないし管状腺癌を混在する典型像としての発生が主経路であることを明らかにした。
- ②先行した管状腺癌から典型像へ移行する発生経路は少数であることを明らかにした。

II 胃腸型形質

- ①従来の粘液形質型分類では、粘膜内では胃型が多く、粘膜下層では分類不能型が多いことを明らかにした。
- ②糖鎖抗原を加えた粘液形質型分類では、粘膜内と粘膜下層ともに胃型が多いことを明らかにした。
- ③上記の違いは癌の粘膜下層進展に伴うコア蛋白抗原の発現の低下、糖鎖抗原の発現の維持によることを明らかにした。

III 浸潤リンパ球

- ①Tリンパ球がBリンパ球より優位であることを明らかにした。
- ②サイトトキシクTリンパ球がヘルパーTリンパ球より優位であることを明らかにした。
- ③癌が粘膜内から粘膜下層へ進展すると、粘膜下層部分にサイトトキシクTリンパ球、ヘルパーTリンパ球、Bリンパ球の浸潤が増加することを明らかにした。
- ④癌組織内での多数のリンパ濾胞形成に伴い、リンパ球浸潤は増加することを明らかにした。

IV リンパ球浸潤胃癌の発生経路と特徴的組織像の形成過程

- ①リンパ球浸潤胃癌は、粘膜内に胃型形質を多くもち、サイトトキシクTリンパ球主体のリンパ球浸潤を伴う低分化腺癌として発生する 경우가最も多いことを明らかにした。
- ②粘膜下層への進展および癌組織内での多数のリンパ濾胞形成に伴い、多彩なリンパ球の増加により、特徴的組織像が形成されることを明らかにした。

審査結果の要旨

本研究は、「リンパ球浸潤胃癌の病巣形成、胃型腸型形質発現及び浸潤リンパ球の特徴についての研究」を課題として遂行された。主な研究項目と成果は下記に要約された。

I 組織型と病巣構築

- ①典型像ないし管状腺癌を混在する典型像としての発生が主経路であることを明らかにした。
- ②先行した管状腺癌から典型像へ移行する発生経路は少数であることを明らかにした。

II 胃腸型形質

- ①従来の粘液形質型分類では、粘膜内では胃型が多く、粘膜下層では分類不能型が多いことを明らかにした。
- ②糖鎖抗原を加えた粘液形質型分類では、粘膜内と粘膜下層ともに胃型が多いことを明らかにした。
- ③上記の違いは癌の粘膜下層進展に伴うコア蛋白抗原の発現の低下、糖鎖抗原の発現の維持によることを明らかにした。
- ④リンパ球浸潤胃癌は、胃型形質を多く有する癌として発生する機会が多いことを明らかにした。

III 浸潤リンパ球

- ①Tリンパ球がBリンパ球より優位であることを明らかにした。
- ②サイトトキシックTリンパ球がヘルパーTリンパ球より優位であることを明らかにした。
- ③癌が粘膜内から粘膜下層へ進展すると、粘膜下層部分にサイトトキシックTリンパ球、ヘルパーTリンパ球、Bリンパ球の浸潤が増加することを明らかにした。
- ④癌組織内での多数のリンパ濾胞形成に伴い、リンパ球浸潤は増加することを明らかにした。

IV リンパ球浸潤胃癌の発生経路と特徴的組織像の形成過程

- ①リンパ球浸潤胃癌は、粘膜内に胃型形質を多くもち、サイトトキシックTリンパ球主体のリンパ球浸潤を伴う低分化腺癌として発生する機会が最も多いことを明らかにした。
- ②粘膜下層への進展および癌組織内での多数のリンパ濾胞形成に伴い、多彩なリンパ球の増加により、特徴的組織像が形成されることを明らかにした。

本研究で明らかにされたリンパ球浸潤胃癌の病巣形成、胃型腸型形質発現及び浸潤リンパ球の特徴についての成果は、リンパ球浸潤胃癌における病巣形成、胃型腸型形質発現及び浸潤リンパ球の基礎的研究と本癌の診断と治療等の臨床応用に大いに寄与するものであると考えられた。